

[実践報告]

国際教育の中で音楽が果たせる一例 ——東アジアの民謡を教材とする授業の提案——

久保絃子

要 約

義務教育の音楽科に「民族音楽」が取り入れられてから10数年が経った。しかし、民族音楽を学校で取り扱うには課題も多い。民族音楽を将来の教育現場を担う現教育学部の学生にどう伝えるのか。民族音楽教育に前向きに取り組んでもらうためにどのようにすればよいのか。

筆者が実際に行った中学校・高等学校での民族音楽授業や小学校・中学校での演奏活動での経験、現教育学部学生へのアンケートなどをもとに、民族音楽の授業方法を考察した。東アジアの民謡を例にとり、歌唱教材を使用する民族音楽教育を提案する。

民族音楽は他国の文化を知る貴重な資料である。音楽科以外での展開の可能性も示す。

キーワード：民族音楽、民族音楽教育の課題、歌唱教材、東アジアの民謡

1 はじめに

義務教育の音楽科に「西洋以外の諸外国の音楽」が取り入れられてから10数年が経った。筆者は導入直後に中学校・高等学校の教職に就き、民族音楽を生徒にどう伝えるか苦慮したりとりである。そして民族音楽について学ぶ中で、民族音楽は西洋諸国以外の文化を学ぶ貴重な資料であることに気が付いた。

しかし、民族音楽を学校で取り扱うには課題も多い。筆者もそうであるように指導者の多くは西洋音楽を専門に学んだ者である。そもそも民族音楽についての知識が乏しい。また音楽科特有の授業数の問題もある。行事のために多くの時間を費やさなければならず、民族音楽のために十分な授業数を確保することが難しい。そして西洋音楽に慣れ親しんだ耳が感じる民族音楽に対する「違和感」である。これは児童・生徒だけでなく、指導者も持つてしまう。

課題の多い民族音楽教育を将来の教育現場を担う現教育学部の学生にどう伝えるか。民族音楽へのハードルを下げ、前向きに取り組んでもらうためにどうすればよいのか、自らの経験をもとにひとつの提案をしようと考えた。

筆者は約10年前から全国の小学校・中学校（のべ50校以上）の音楽教室の演奏に向向いて

いる。音楽教室では様々な国の曲を混声4部合唱で演奏している。クラシックだけでなく、ヨーロッパの民謡や日本、東南アジアの曲を編曲したものも歌う。その時、ヨーロッパの曲とそれ以外の国の曲に、児童たちに大きな反応の違いはない。そこに西洋以外の諸外国の音楽への違和感存在しないのだ。それならば民族音楽への入り口として、諸外国の音楽を歌唱教材として扱えないか考えた。

民族音楽は他国の文化を知る貴重な資料である。オリンピックも近づき、他国への関心も高まる今、積極的に民族音楽教育に取り組むためにはどのようにしたらよいのか、その一例を示したい。

2 東アジア音楽と日本音楽

音楽は人間の基本的な営みのひとつであり、どの国、どの民族を持っている。音楽は国境なく伝播し、その土地になじみ変化をしてきた。現代、西洋音楽は世界各国に広まったが、その技法は各国の持つ感性、感覚と融合して、各国独自の音楽文化となっている。私たち日本人も日常的に西洋音階で作られた音楽に親しむようになった。しかし一方で、各国の伝統音楽は「民族音楽」として西洋音楽の対となるジャンルとして近年世界に広まっている。21世紀に入り各国の伝統音楽が見直されつつある。

日本は明治維新で西洋文化を取り入れる前から様々な文化を大陸から取り入れてきた。西洋文化が渡来する前は、隣国である中国、朝鮮半島からより高度な文化を吸収してきた。音楽も7世紀ごろから中国、朝鮮半島から積極的に取り入れ、9世紀国風文化の中で日本独自の音楽を作り上げた。私たちが中国、朝鮮半島の音楽を耳にすると、どこことなく耳なじみがよく感じるはそのせいであろう。しかし、その東アジアの音楽を私たち日本人の多くは詳しく知らない。

東アジアの音楽を知ることは、風土や歴史を知るだけでなく、有史以来続く中国や朝鮮半島と我が国との長く深い関係を知ることにもなる。日本の音楽と中国、朝鮮半島の音楽は同じルーツを持ち、それぞれの国の風土、民族性に合わせて発展した。実際に各国の民謡を歌唱することで東アジアの音楽を体感し、各国を理解することができるのである。

また、音楽は有能なコミュニケーションツールでもある。歌はいつでもどこでも演奏できる。東アジアの民謡を覚えることは、その国を身近に感じるだけでなく、将来その国の人と出会った時のコミュニケーションの引き出しのひとつになりえる。東アジアの民謡を学ぶことで児童の国際理解に役立つと考える。

3 民族音楽を授業で取り扱う際に生じる問題の考察

1) 現場で生じる問題

平成10年の教育課程審議会の答申における音楽科の改善の基本方針では『(ウ)各学校の段階の特質に応じて、我が国や諸外国の音楽文化についての関心や理解を一層深める表現活動及び鑑賞活動の充実を図るとともに、国歌「君が代」の指導の一層の充実を図る¹⁾』とある。以降、教科「音楽」に日本の伝統音楽や西洋音楽以外の諸外国の音楽の学習が取り入れられた。教育芸術社の小学校教科書では平成14年度版で南米などヨーロッパ以外の国の音楽が、平成17年度版からアジアの音楽が掲載されている。現場では取り組みが始まったばかりである。

それまで教師は西洋音楽を学び、得た知識と技術で授業を行ってきた。筆者も音楽大学で中学・高等学校音楽教諭の免許状を取得したが、専門的に学んだのは西洋音楽である。民族音楽は講義を受けただけである。大学在学中に前述の答申が出され、当時現職の音楽教員や教職志望の学生たちの中で民族音楽をどのように扱うか頻りに話題になっていたのを記憶している。多くの音楽関係者が未知の世界への挑戦のように感じていた。

筆者は実際の教育現場で民族音楽の扱いに非常に苦慮したひとりである。まず、基礎知識の勉強に大量の時間を費やした。ほかの教材と違い、民族音楽に関しては教えるほどの知識を何も持っていないに等しかったからである。授業、校務分掌がある中で多くの時間を民族音楽の授業準備に割くことになった。西洋音楽を学んできた筆者には難しい教材だった。

「音楽」は小学校・中学校・高等学校問わず、西洋音楽を理解していないと指導することができない教科である。「音楽」の主たる教材が西洋音楽である以上、教員養成機関でも教科「音楽」の指導は西洋音楽が中心となる。現場で「音楽」の教壇に立つのは西洋音楽を学び理解している者である。しかし、民族音楽は同じ音楽でも、西洋音楽とは全く違う音楽である。授業で民族音楽を扱う際には、西洋音楽の知識だけでは太刀打ちできない。民族音楽には民族音楽の知識が必要なのである。

民族音楽を現場で活用するためには、まず、将来教員となる学生たちが民族音楽に関心を持って学ぶことが必要である。現教育学部の学生の現状を把握し、民族音楽を学生たちにどう伝えていくべきか考察したい。

2) 現教育学部の学生の民族音楽に対する関心、知識

実際にこの過渡期に児童・生徒として民族音楽の授業を受けた現学生はどのように感じているのか。将来指導者になる可能性がある玉川大学教育学部の学生115名にアンケートを行った。彼らの多くは平成10年以降に小学校・中学校に在学しており、学校に民族音楽が取り入れられた直後に義務教育を受けている。

アンケート冒頭で『民族音楽のイメージ』について聞いた。(図1)

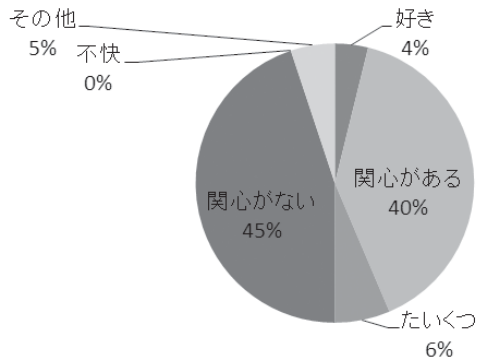


図1 民族音楽のイメージ

「好き」「関心がある」というポジティブなもの、「たいくつ」「関心がない」というネガティブなものに大差はなかった。しかし、「その他」で「聴く機会がないのでわからない」「知らない」などの回答もあり民族音楽をイメージできない学生もいた。また、選択肢にあった「不快」を選んだ学生はいなかった。

学校における民族音楽の習学状況について聞いた。全体の約5分の1の学生が保育園・幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、いずれの教育機関でも民族音楽を学んだ覚えがないと回答した。習学した地域は、日本が1番多く、続いてヨーロッパ、東南アジアと続く。隣国である東アジアはあまり取り扱われていない印象があった。西アジア、中央アジアはいなかった。ヨーロッパの民族音楽は現在の西洋音楽に近く耳なじみや良いことや、東南アジアは「ガムラン」や「ケチャ」などが視覚的にも聴覚的にもわかりやすいため、学校現場で取り入れやすい地域といえる。その点、東アジアは近いがゆえに音楽的な違いを見出しにくく、扱われにくいのかもしれない。

教育機関で民族音楽を学んだと答えた学生79名に『民族音楽の授業の感想』を聞いた。(図2)

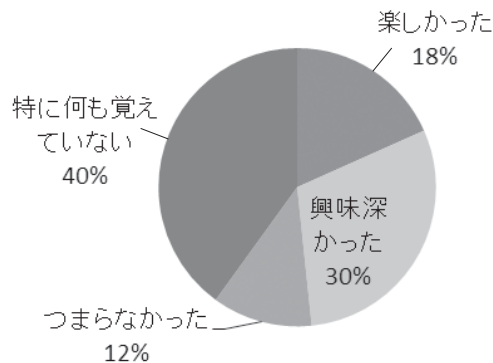


図2 民族音楽の授業の感想

「楽しかった」「興味深かった」という感想が半数を占めた。「つまらなかった」と回答したのは、わずか12%であった。しかし、だからと言って民族音楽の授業が当時の彼らの心に響いていたのかというと、そうではないようである。「特に何も覚えていない」という回答が40%もいるのである。「つまらなかった」「特に何も覚えていない」と回答した学生の多くは「興味がなかった」「いつもと違う音楽だったから」などの理由を挙げた。しかし、「楽しかった」「興味深かった」と回答した学生の理由も「いつもと違う音楽だったから」や「知らないことが知れて楽しかった」という回答である。授業の展開の難しさがこの結果からもわかる。

授業を受けた学生の感想とアンケート冒頭で行った民族音楽のイメージの関係を調べた。(図3) 授業に対して「楽しかった」「興味深かった」というポジティブな感想を持った学生は現在でも民族音楽に関心を持っている比率が高い。一方で授業に対して「つまらなかった」とはっきりとしたネガティブな感想を持っている学生は「民族音楽=たいくつ」というイメージを抱いている。授業が原因とは言い切れないが、興味深い結果である。

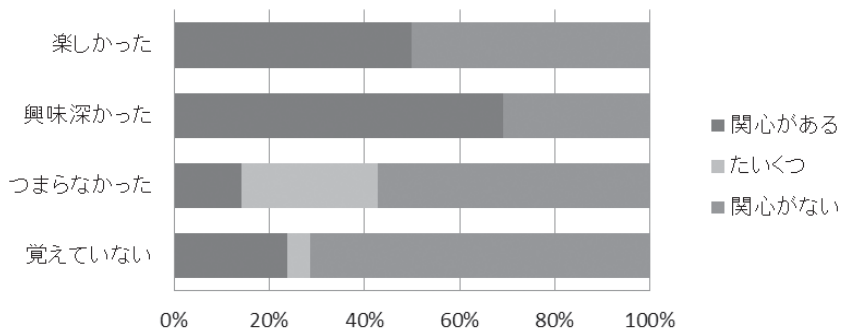


図3 授業の感想と民族音楽のイメージ

さらに興味深いのは、授業の有無と民族音楽のイメージである。(図4)人数の違いはあるが、授業を受けていない学生の方が、授業を受けている学生よりも民族音楽への関心が高かった。

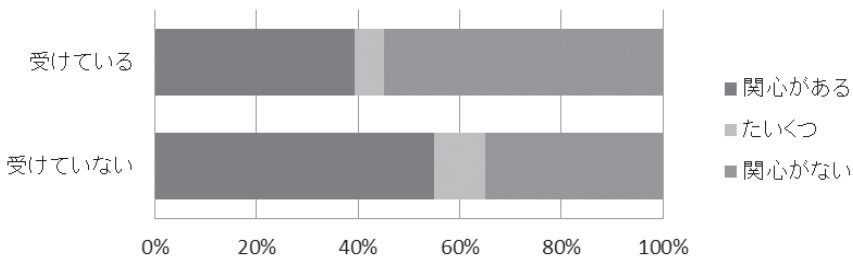


図4 授業の有無と民族音楽のイメージ

民族音楽は西洋音楽が中心の現在の日本で親しみやすい教材とは言えない。しかし、子供た

ちは、はじめから関心がないわけではなく、授業で受けた印象が民族音楽へのイメージの決め手となっている場合があるようだ。多くの児童・生徒が民族音楽を学校教育で知るであろうことを想定すると、その取り扱いには大きな責任が伴う。

現在の彼らの民族音楽に対する関心についても聞いた。『日常的に民族音楽を聴きますか』という問いには、ほとんどの学生が「いいえ」と回答している。「はい」と回答している学生も詳しく聞いてみると民族音楽という用語自体を勘違いしていることが多く、日常的に民族音楽を聴いている学生はほほえないとあってよかった。アンケート実施中にも「民族音楽って何ですか」という質問も受けた。

彼らはどのような民族音楽を知っているのか名称だけ提示し聞いた。(図5)

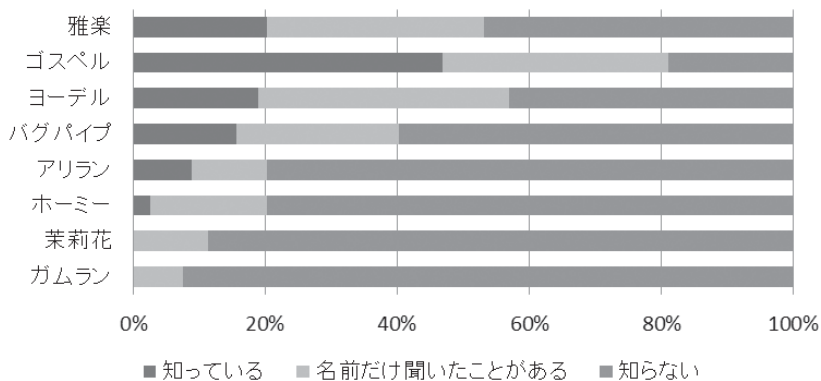


図5 各民族音楽の認知度

圧倒的に認知されていたのは「ゴスペル」で、これは音楽のジャンルとして一般的にも広く知られているからであろう。実際にゴスペルサークルなどは学生にとって身近な存在である。民族音楽の分野でも「ゴスペル」「ヨーデル」「バグパイプ²⁾」と欧米の音楽の方が知られている傾向がある。アジアの民族音楽についてはほぼ「知らない」という回答である。日本の「雅楽」ですら「知らない」が約半数である。モンゴルの「ホーミー³⁾」は特徴的な歌唱法で、取り扱いやすい教材なのでおそらく授業で学んだ学生もいるのでであろう。「知っている」「名前だけは聞いたことがある」が約20%いてアジア音楽の中では認知度が高かった。ここにあげた8つの民族音楽は小学校・中学校の教科書に掲載されているメジャーなものである。それでも8つ中5つは半数以上の学生が「知らない」と回答した。

学校に民族音楽が取り入れられる前の世代のデータをとっていないため、学校の民族音楽教育の成果を論ずることはできない。ただ、少なくとも現教育学部の学生にとって民族音楽が身近なものとは言えないことがわかった。

3) 民族音楽の取り扱い方についての提案

明治以降、学校に導入された音楽が西洋音楽だったことが、日本における音楽の西洋化の原因ともいえよう。学校における音楽教育の導入のために、音楽取り調べ掛が掲げたのは『①東西二洋の音楽を折衷して新曲を創作すること。②将来国楽を振興しうる人材を養成すること。③諸学校に音楽を実施すること⁴⁾。』の3つの方針である。①の方針のもと、子供たちのために西洋音楽の手法を用いた多くの唱歌が作曲された。日本人になじみのある音階やリズムを用いた唱歌や軍歌の普及によって、西洋音楽は庶民に浸透していった。その後、全国の小学校に西洋音楽による「音楽」の授業が導入され、日本の音楽は西洋化されていく。現在、日本人が触れている音楽の多くは西洋音楽をルーツとしたものである。

日本における音楽が西洋音楽主流になったことにより、日本の伝統音楽を日常的に耳にする機会は少なくなっている。実際のアンケートでも「雅楽」を半数以上の学生が認知できていなかった。神社やお正月に流れていても、それを音楽として認識できていないようである。

平成に入って日本の伝統音楽や諸外国の音楽を取り扱うよう学習指導要領に定められ、その重要性が説かれるようになった。しかしそれ以降に教育を受けた現学生にとっても民族音楽というものは身近なものではない。授業を受けていても民族音楽に対してネガティブな印象を持っている学生もいる。このような状況の学生が次の授業者となり、民族音楽の授業を行わなければならない。筆者は民族音楽を大学に入ってから知り、ネガティブな印象がなかっただけ前向きに取り組むことができた。しかし、授業者が退屈と感じる音楽を、児童に関心を持って取り組ませるのは難しいことである。「民族音楽を楽しもう」「民族音楽の良さを感じとろう」という授業展開は少々強引だと思われる。耳なじみのない音楽を「楽しい」とか「おもしろい」と感じるのはなかなかできないことである。

そこで、西洋音楽の力を借りて民族音楽との距離を縮めることはできないだろうか。例えば、明治時代に出版された『唱歌』に載せられた曲は今でも日本人の心を揺さぶり歌い継がれている。古くからの日本的な音律をもとに西洋音階を用いて書かれたそれらの曲は、西洋音階で書かれているが「日本の歌」である。アジアの周辺諸国も音楽の西洋化が進んでいる。五線譜上に起こされた各国の伝統音楽を、私たち日本人が演奏することも可能になった。実際に演奏しながら、アジア独特な音の運びや節回しなどを感覚的に感じるができるのである。

雅楽や諸外国の民族音楽を鑑賞することは国際理解にとっても有意義な活動である。しかし、鑑賞の授業だけでは民族音楽に親しみを感じさせることは難しかったと筆者は自身の経験から感じている。西洋音楽の力を借りて五線譜に起こされた各国の伝統音楽を実際に歌唱することで、他国の音楽に親しみ、国際理解を深めることはできないだろうか。民族音楽を鑑賞教材としてだけでなく、表現教材として使用する提案である。現教育学部の学生に小学校での民族音楽の活用方法の一例を示し、学生の民族音楽への関心を高めたい。

4 東アジア音楽の歌唱教材

東アジアの音楽はポップスを含め、今私たちの周りに多くあるが、ここでは現行の小学校認定教科書に掲載されている歌唱教材の中から日本・韓国（朝鮮半島）・中国の曲を1曲ずつ挙げる。どの曲も五音階で書かれており、響きに共通の流れを感じると同時に、各国独特のリズム感や跳躍が見られる。地理的な近さだけでなく、文化的な近さを歌唱することによって体感し、近隣国への親近感を高める教材として期待できる。

1) 日本《さくらさくら》

さくらさくら

日本古謡

♩=72~80

さくら さくら のやまも さとーも みわたす
かぎーり かすみか くもーか あさひに におーう
さくら さくら はなざーかり

『愛吟集』玉川大学出版部 p.177

〈歌詞〉

『うたのほん（下）』現行教科書

さくら さくら
野山も里も 見渡すかぎり
霞か雲か 朝日におう
さくら さくら 花ざかり

『箏曲集』

さくら さくら
弥生の空は 見渡すかぎり
霞か雲か 匂いぞ出ずる
いざや いざや 見にゆかん

あたり一面に咲いたさくらの花が、まるで霞や雲のように見え、それが朝日に染まりいっそう美しいという日本の春の情景を歌った歌である。

小学校4年生の共通教材である。4年生以下でも日本に住んでいれば一度は聞いたことがある日本古謡であろう。日本=さくらのイメージは海外でも強い。そのさくらの美しさを表現した曲として海外でも有名である。

明治21年音楽取調掛が編集した『箏曲集』に初めて収められた。旋律は近代箏曲のもので、

陰音階（都節音階）〈表1〉が用いられている。また、4分の4拍子で記譜されており、2拍子系を基調とする日本音楽の特徴を感じやすい曲である。

『箏曲集』に掲載された歌詞は、昭和16年『うたのほん（下）』に掲載される際、口語体に改作された。現行の教科書は『うたのほん（下）』に掲載された口語体のものである。しかし、古くから日本人に愛唱されてきたことや、平成5年度から平成13年度まで中学校の共通教材で『箏曲集』の歌詞が取り上げられていたこともあり、二つの歌詞が世の中に混在している。実際に生徒・学生に歌唱させると『箏曲集』の歌詞で歌唱する者が多い。

2) 韓国《アリラン》

アリラン

安西 薫 日本語詞
朝鮮半島民謡

♩=72~80

ア - リラン - ア - リラン - ア ラ - リ - ヨ - - - -

ア - リラン - と う げ - の - み - ち と お く

そ ら た か く か り は ゆ - く - - - -

や - ま の - ふ も と - に - ひ - は し ず む

『愛吟集』 玉川大学出版部 p. 254

〈日本語歌詞〉⁵⁾

アリラン アリラン アラリヨ
アリラン峠の 道とおく
空高く 雁はゆく
山のふもとに 日はしずむ

〈原語大意〉⁶⁾

アリラン アリラン アラリヨ
アリラン峠を 越えて行く
私を捨てて 行く君は
十里（※）も行かずに 足が痛む

※日本の一里=約4キロメートル

アリランは峠の名前と言われているが、伝説の女性の名前だとか、愛する夫と離れる「愛離郎（アリラン）」から来たもの、など諸説ある⁷⁾。

韓国を代表する民謡である。朝鮮民族の間で広く愛唱される歌で、地方によって歌詞やテーマが様々でその数は数百にも上るといわれる。ここでは小学校教科書に掲載されている《京畿

道アリラン》を使用する。また、現行の平成27年度版の小学校教科書『小学生の音楽5』（教育芸術社）には1拍を8分音符で2分割する楽譜が掲載されているが、ここではより朝鮮半島の音楽の特徴が表されている『愛吟集』（玉川大学出版部）の楽譜を示した。

朝鮮半島の音楽の特徴で最も重要なのが、「長短（チャンダム）」と呼ばれるリズムである。東アジアでは珍しい3拍子を基本とするリズムで、3拍子や変拍子を含めた躍動的なリズムを用いる。古典から民間音楽まで「長短（チャンダム）」による音楽はないといわれるほど、朝鮮音楽のかなめとなるリズムである。2拍子系を基調とする日本とは大きく異なる。《京畿道アリラン》も4分の3拍子で書かれているが、さらに1拍を3分割して音を揺らすため8分の9拍子のような拍の刻みになっている。

音階は五音音階だが、日本音楽に多く用いられているヨナ抜き音階とは違い、もの悲しい五音音階〈表1〉を用いている。

3) 中国《まつり花》

まつり花

花岡 恵 日本語詞
中国民謡
小原 光一 採譜

♩=84~92

か ぜ に ゆ れ て る ま つ り か え だ い っ ぱ い
 さ い て あ た り に ー か お ー る
 こ ー の ー は な つ ん ー で お く ー り ー ま ー
 す や さ し い あ の ひ と に

平成27年度教科書『小学生の音楽5』教育芸術社 p. 61

〈日本語歌詞〉⁸⁾

風にゆれてる まつり花
 枝いっぱい咲いて あたりにかおる
 この花つんで おくります
 やさしい あの人の

〈原語大意〉⁹⁾

とても美しい まつり花
 芳しく美しい花が 木いっぱいに咲いている
 よい香りと白さは みんなの誇りだ
 この花を摘んで あの人の人にあげよう
 まつり花よ まつり花よ

花の香りに包まれた美しい情景と、大切な人とその花の美しさ、香りをともに感じたい、という心情が歌われている。

学生アンケートの「茉莉花」と同曲である。ここからは小学校教科書の表記を用いる。


中国に伝わる代表的な民謡のひとつである。地方によって歌詞や旋律が少しずつ異なる。ここでは小学校教科書に掲載され、現在最も広く知られている河北省の《まつり花》を取り上げる。

中国も日本と同じように2拍子を基調とする。この曲も4分の2拍子で記譜され、ゆったりとした2拍子が特徴である。音階は、一般的にヨナ抜き音階と呼ばれ、日本音楽にも多くみられる明るい五音音階〈表1〉を用いている。1拍を2つに割って、上がっては下がる旋律の繰り返しが特徴的な曲である。

「まつり花」とはジャスミンの花のことである。6月頃に花を咲かせ、花は非常に強い芳香を放つ。その花卉を乾燥させ茶葉にまぜたものがジャスミンティーである。中国の人々にとっては身近な植物である。

4) 3曲の特徴の比較

〈表1〉

	《さくらさくら》	《アリラン》	《まつり花》
音階			
旋律	1拍ずつ進行し、フレーズ間に大きな跳躍はない。フレーズが変わるときに跳躍し、全体的には横にゆったりと流れている。	音を伸ばしながら1拍を3分割して旋律を揺らしている。大きな跳躍はなく、徐々に音域を上げ盛り上がりをつくっている。	1拍を2分割して音が2度、3度で上がったり、下がったりを繰り返す。音がゆったり来たり縫うようにして流れている。
音域	1オクターブと1度	1オクターブ	1オクターブと4度
拍子	2拍子系 4分の4拍子	3拍子系 4分の3拍子	2拍子系 4分の2拍子

音階は3曲とも五音音階が用いられている。《まつり花》で使われているヨナ抜き音階は日本音楽にも多くみられ、私たち日本人が親しみを感じる音階である。

旋律は3曲とも異なった特徴がある。どの曲も音域は1オクターブ以上と決して狭くないが、その音程の移動に特徴がある。《さくらさくら》の音域は広いものの、フレーズ間で大きな跳躍が見られないため、平坦に感じる。反対に《アリラン》の音域は《さくらさくら》とほとんど変わらないが、音を揺らしながらフレーズ間で細かく音程が変化するため、躍動的である。《まつり花》は1オクターブと4度とかなり音域が広い。その広い音域を2拍子のゆったりとし

たテンポで縫うように上下する旋律は優美である。同じ2拍子系の《さくらさくら》には見られない旋律の動きである。

これらの特徴を歌唱することによって児童が感じ体得できるような教材の取り扱い方法が望まれる。音楽は中国から朝鮮半島を経由して日本に伝わったが、拍子の文化は中国と日本に共通項が残り、朝鮮半島だけ独自に発展した。このことは文化の伝来や発展などを考えるきっかけにもなる。

5 授業の展開案

拍子や五音音階などに触れるというよりは、旋律に親しみ、隣国の音楽を身近に感じることを目標としたい。展開案を示す。「音楽」の授業では第5学年を対象とする。今回は音楽科以外での活用も想定しているが、その場合も対象は高学年とする。

1 題材名 「周辺諸国の歌を歌おう」

2 題材設定理由

オリンピックも近づき諸外国への関心を深めたい時期である。近隣国である韓国・中国の文化について学びたい。韓国・中国の民謡を実際に歌唱することによって、児童に2国に対する親近感を持たせたい。また児童が将来、韓国・中国の方に会った時のコミュニケーションツールとして民謡を活用できることも期待し、本題材を設定した。

3 目標

- ・韓国・中国に関心をもつ
- ・《アリラン》《まつり花》を歌唱できるようにする

4 指導計画

第5学年「音楽」で使用する場合は、「音楽」全体の授業数も鑑み1時で完結させる。「音楽」以外の教科で扱う場合は全2時で行いたい。

時	目標	学習内容
1	韓国・中国について知ろう	韓国・中国について基本的な知識を養う。 白地図での位置の確認、人口、産業、スポーツなど、調べ学習を行い、発表する。
2	韓国・中国の民謡を歌おう	《アリラン》《まつり花》の歌唱をする。

5 本時…「音楽」で行うとし全1時間扱い

1) 目標：韓国・中国について知る。

《アリラン》《まつり花》を歌唱できるようにする。

2) 展開

音楽も文化のひとつである。国際理解の授業として音楽科以外での活用も期待したい。

	学習活動	指導上の留意点
導入	手遊び 《あんたがたどこさ》	・《あんたがたどこさ》が日本に古くから伝わる手まり歌であることなどに触れる。
	既習曲《さくらさくら》を歌唱する。	・伸びやかに歌うことに重きをおいて、日本的な旋律に注意が向くよう留意する。
展開	韓国・中国について知る。	・日本を含めたアジアの地図を示す。 ・韓国, 中国を取り上げることを告げ, それぞれの国の場所, 知っていることなどを発表させる。
	《アリラン》を歌唱する。	・旋律に親しむことが目的なので, 伸びやかに歌唱できるよう留意する。 ・「長短(チャンダム)」の特徴を感じられるように留意する。 ・実際の演奏を鑑賞して歌唱の工夫をする。 ・《さくらさくら》と似ているところ, 違うところを発言させる。
	《まつり花》を歌唱する。	・旋律に親しむことが目的なので, 伸びやかに歌唱できるよう留意する。 ・8分音符の跳躍を滑らかに歌唱できるよう留意する。 ・実際の演奏を鑑賞して歌唱の工夫をする。 ・《さくらさくら》《アリラン》と似ているところ, 違うところを発言させる。
まとめ	ワークシートをまとめる。 《アリラン》《まつり花》を歌唱する。	・各国の音楽的特徴を端的にまとめ児童に伝える。 ・児童が感じたこと, 気付いたことを自由に発言させる。 ・最後の歌唱はのびのびとできるよう, 歌詞を板書するなどする。

6 学生への実践と反応

教育学部教育学科「音楽科指導法」の受講生（3年生19名）に「近隣諸国の歌を歌おう」と題して約30分の授業を行った。前時までに共通教材にある日本古謡やわらべ歌の手遊びなどを授業で行っている。音楽を使った授業のひとつの提案として行い、授業後にアンケートを実施した。

1) 実践内容


プリント（図6）を使用し授業を行った。このプリントは学生への授業のためのもので、小学生にそのまま使用することは想定していない。

白地図を見ながら近隣諸国について話し合った。まずは韓国・中国の場所の確認をしてから、モンゴルやロシア・北朝鮮・タイなどアジア周辺諸国の様々な知識を交換した。人口、面積については「音楽科指導法」の授業で地図帳などを持って授業に臨んでいないため、事前に書き込んだ。日本・韓国・中国は、人口・面積・得意なスポーツ競技などについても話し合った。

東アジアの白地図を用いることで、文化が中国大陸から朝鮮半島を通して日本に渡ってきたことを確認することもできた。

近隣諸国の基礎知識、文化の流れを確認してから《さくらさくら》《アリラン》《まつり花》の歌唱を行った。各国の音楽的な特徴を説明しながら、旋律をしっかりと歌唱できるよう練習を行った。《さくらさくら》は既習曲なので、日本的な雰囲気を感じる程度にし、《アリラン》《まつり花》の歌唱を中心とした。《アリラン》は「長短（チャンダム）」の特徴を出して、《まつり花》は旋律の跳躍に注意しながら歌唱した。また歌唱の特徴として、《アリラン》は演歌のこぶしのような歌いまわしがあるが、《まつり花》はこぶしを付けずまっすぐ旋律を歌うのが適している、など歌唱の工夫もした。

近隣諸国の歌を歌おう 氏名 _____





	日本	大韓民国	中華人民共和国
場所			
国旗			
人口	約1億2688万人	約5143万人	約13億4133万人
面積	377,961.73 ㎢ (62位)	100,210 ㎢ (109位)	9,596,960 ㎢ (3位)
スポーツ			
音楽の特徴			

図6 授業使用プリント¹⁰⁾

2) 学生の反応

学生は近隣諸国について積極的に話し合い、普段の「音楽」の授業と少し違った取り組みに前向きに取り組んでいた。歌唱時も知らない歌を歌うということを楽しんでいるようにみられた。歌いながら《さくらさくら》との違いや、それぞれの曲の旋律の違いなど、気付いたこと

を発表していた。受動的な鑑賞ではなく、白地図に書き込む作業や歌唱する能動的な活動を行うことによって、積極的に取り組んでいるように感じた。

授業前の3曲の認知度について授業後にアンケートを行った。それぞれの曲を「知っている」「聴いたことがあった」「知らなかった」から選択方式で行った。《さくらさくら》は「音楽科指導法」の授業で既習済みなので全員が「知っている」だった。実際に旋律を聴いても《アリラン》《まつり花》を「知っていた」「聴いたことがあった」と回答したのは半数以下にとどまった。

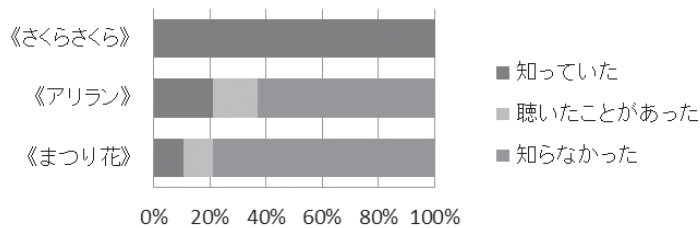


図7 授業前の各曲の認知度

授業の感想を記述方式で書いてもらった。大きく分けて「曲の感想」が9名、「授業の感想」が10名となった。

《アリラン》に対しては5名が感想を述べており「歌いやすかった」「好き」など親しみを感じ、口ずさみやすい曲と5名とも好意的な感想であった。《まつり花》の感想は4名が述べており「明るい」「身近に感じた」など好意的なものが3名であった。その一方で音程の跳躍が多いため「難しかった」「大学生でも難しいのに小学生に歌えるのか」など曲の難しさを指摘する感想も2名あった。(1名は好意的に感じつつ難しさも感じていた。)《まつり花》を小学生の歌唱教材として使用しているのは教育芸術社だけである。高校の「音楽」の教科書にも歌唱教材として掲載されている曲なので確かに難易度の高い曲である。《太湖船¹¹⁾》など他の曲の使用が好ましい場合もあるだろう。また《さくらさくら》について具体的な感想を述べたのは2名で、「歌いづらい」「韓国・中国の民謡の方が歌いやすい」とどちらも好意的とは言えず、日本の伝統音楽の実践の難しさを感じた。もともと箏曲であることに加え、《アリラン》《まつり花》が西洋音楽的なコード進行をしているので余計に歌いづらさを感じてしまったのかもしれない。日本の曲も民謡から選ぶなど工夫が必要であったかもしれない。中国、日本の歌の選択に今後の課題が見えた。

「授業の感想」としては、「近隣諸国の音楽について無知だったことを知れた」として、近隣諸国の音楽に関心を持つきっかけとなった、という感想が3名あった。また、「欧米の国歌と《君が代》の違いを感じていたが、アジアの音楽に共通点があることを知って興味深かった」という感想も1名いた。欧米の音楽は知っているのに、近隣諸国の音楽を知らない事実気が付い

た学生がいたようである。今回のことで「各国に違う音楽文化があることを知った」という内容の感想が6名あった。「授業の感想」を書いた10名ともに民族音楽に興味を示す感想を書いた。学生に民族音楽に関心をもってもらうという一定の目的は達成できた。

「アジアの音楽を歌うことが楽しかった」という感想も3名いて、近隣諸国の音楽が妙に心地よかったり、親しみを感じたりと文化の近さを感じたようである。実際に体を使って歌唱し、「この音が取れない」「リズムがわからない」など繰り返し練習した結果、心に残ったものもあるのだろう。歌唱することで各国の音楽的な特徴を捉え、親近感を持つことができたのではないだろうか。

最後に『音楽は国際理解の教材に適していると思うか』という質問を「思う」「思わない」「わからない」の選択方式で行った。19名中18名が「思う」、1名が「わからない」と回答した。「思わない」を選択した学生はいなかった。今回の受講学生も民族音楽に関心の高い学生たちではなかった。しかし実際に行ってみると積極的に参加し、その面白さを語っていた。民族音楽を国際理解の教材に活用する一例を学生に示すことができた。

7 民族音楽教育の可能性

音楽はどの文化圏にも存在し、それぞれの国・民族で育まれる文化である。民族音楽は各国独自の貴重な文化である。その音楽を鑑賞、歌唱することによって、他国の文化を感じることができる。また、他国の歌を歌唱し覚えることでコミュニケーションツールとして活用することができる。そこに国際理解が生まれる。民謡の歌唱であれば、特別な楽器などは必要ない。教科「音楽」の枠を超えて民族音楽を国際理解の教材として活用することができるのではないだろうか。指導者の知識不足、「音楽」自体の時間数の制限など、民族音楽教育をとりまく環境に課題は多いが、国際理解の教材のひとつとして民族音楽を活用して行きたい。

そのためにも、教員養成機関である大学教育の現場では西洋音楽だけでなく、様々な国に様々な音楽があることを学生に伝えていく必要がある。その時には民族音楽にネガティブな印象を与えないようにする努力が不可欠である。これらのことを課題として今後も「国際理解のなかで音楽が果たす役割」について研究を続けたい。

8 あとがき

五線譜上に起こされた楽譜を用いて韓国・中国の民謡の歌唱を行った。特別な民族楽器を使用することなく、普段の歌唱授業と同様に取り組めた。西洋音楽の手法を借りることで、民族音楽に抱く「違和感」を少なくして諸外国の音楽に触れることができた。また、鑑賞のみでワークシートを作成するより「歌う」という能動的な活動を行うことで、音楽的な特徴の違いもより感じる事ができた。このことから五線譜上に起こされた諸外国の民謡の歌唱でも、他国

の音楽文化に触れることは十分に可能であるとわかった。

また、このような諸外国の民謡の歌唱は民族音楽を知る入口として適している。普段とあまり変わらない歌唱で行うことで、民族音楽へのハードルを下げることに一定の成果があった。

今回、義務教育に民族音楽教育が取り入れられた後に学校教育を受けた学生に民族音楽の意識調査を行えたことは、非常に有意義であった。その5分の4の学生が何らかの形で民族音楽教育を受けており、現場の先生方の並々ならぬ努力を感じた。

しかし新たな課題もみられた。民族音楽への関心や認知度が低いことである。大学でも音楽の指導は西洋音楽が中心になる。西洋音楽以外の音楽の存在を知らせる努力が大学の教育現場にも必要であると強く感じた。また、授業の印象と民族音楽の印象の関係も興味深かった。アンケートでは民族音楽の授業の印象が悪いと、民族音楽そのものへの印象も悪くなっているケースがあった。これは当然、大学教育にも当てはまるわけで、民族音楽を授業で取り扱う際にはより一層の工夫が必要であると感じた。どのようにすれば学生が民族音楽を好意的に受け取り、将来彼らの教員生活に役立てることができるのか、これらのことを課題として今後も「国際理解のなかで音楽が果たす役割」について研究を続けたい。

最後になるが、声楽・音楽教育の師でありこの研究にも多くのご助言を下さった梅沢一彦先生、またアンケート、実践に協力してこのような考察の機会を与えてくれた学生たちに心から感謝の意を表したい。

JASRAC 出1603481-601

注

- 1) 文部省『小学校学習指導要領解説 音楽編 平成11年5月』 pp. 2-3
- 2) スコットランド地方に残る風袋を押して数本の笛を鳴らす楽器。
- 3) 2つの声が同時にできるように聴こえるモンゴルの発声法。
- 4) 久保田慶一他著『はじめての音楽史』音楽之友社、1996年 p. 168
- 5) 『小学生の音楽5 指導書 実践編』教育芸術社、2015年 p. 46
- 6) 『小学生の音楽5 指導書 実践編』教育芸術社、2015年 p. 46
- 7) 井口淳子著『東アジアと日本の音楽』ポプラ社、2003年 p. 26
- 8) 『小学生の音楽5 指導書 実践編』教育芸術社、2015年 p. 47
- 9) 『小学生の音楽5 指導書 実践編』教育芸術社、2015年 p. 47
- 10) 白地図はWEBサイト「白地図専門店」より
- 11) 平成23年度版教科書『新しい音楽5』（東京書籍）に掲載されていたが、平成27年度版から『新しい音楽』がなくなったため、現行の小学校教科書で掲載されているものはない。

参考文献・引用文献

- 櫻井哲男『アジア音楽の世界』世界思想社、1997年
藤井知昭監修「音と映像による新世界民族音楽大系」日本ビクター、1994年

- 井口淳子『東アジアと日本の音楽』ポプラ社, 2003年
蒲生郷昭他著『岩波講座日本の音楽・アジアの音楽別巻1』岩波書店, 1989年
黒沢隆朝『東南アジア音楽紀行』国立音楽大学附属図書館, 1997年
黒沢隆朝『東南アジアの音楽』音楽之友社, 1970年
張師『韓国の伝統音楽』成甲書房, 1984年
宮塚利雄『アリランの誕生』創知社, 1995年
柘植元一・塚田健一編『はじめての世界音楽』音楽之友社, 1999年
久保田慶一他著『はじめての音楽史』音楽之友社, 1996年
若林忠宏『もっと知りたい世界の民族音楽』東京堂出版, 2003年
吉富功修編著『小学校音楽科教育法』ふくろう出版, 2010年
梅沢一彦編著『教科力シリーズ 小学校音楽』玉川大学出版部, 2015年
谷正人「異文化理解における『わかりにくさ』の効用」『音楽教育学第37巻-2号』日本音楽教育学会, 2007年, p. 1-11
西島千尋「学校教育において『異文化の音楽』はいかに教えられるべきか—1980年代*the British Journal of Sociology of Education*において展開されたK. スワニクとG. ヴァリアミー&J. シェファードの論争をめぐって—」『音楽教育学第38巻-2号』日本音楽教育学会, 2008年, p. 1-7
『小学校学習指導要領解説 音楽編 平成11年5月』教育芸術社, 1999年
平成23年度版教科書『新しい音楽5』東京書籍, 2011年
平成27年度版教科書『小学生の音楽5』教育芸術社, 2015年
平成27年度版教科書『小学生の音楽4』教育芸術社, 2015年
『小学生の音楽5指導書実践編』教育芸術社, 2015年
『小学生の音楽5指導書研究編』教育芸術社, 2015年
『小学生の音楽4指導書研究編』教育芸術社, 2015年
『愛吟集 改訂第三版』玉川大学出版部, 2005年
『ニューグローブ音楽大事典』講談社, 1993年
『ポケット音楽辞典』音楽之友社, 1998年
文化財庁webページ
<http://jpn.cha.go.kr/japanese/html/sub4/sub15.jsp> 2015/10/16閲覧
坂東浩-オリンピックに芸術競技
<http://pianomed-mr/index.php> 2015/7/31閲覧
白地図専門店 http://www.freemap.jp/sta_con/free.html 2015/6/28ダウンロード

The Instance Music Achieves in the International Education: The Case of the Class Using Folk Song in East Asia

Hiroko KUBO

Abstract

More than ten years have passed since “folk music” was introduced to a compulsory education. But to teach folk music at school has a lot of problems. How should folk music be handed down to the student who will become a teacher in the future? I suggest one educational method so that they can work on folk music actively. I consider a way to teach folk music in class through the experiences of lessons I gave a junior high school and high school, through the experience of music performance at elementary school and junior high school, and on the basis of questionnaire from university students. Giving an example of folk song in East Asia, I propose a folk music class using song materials. Folk music is a valuable material from which we learn about cultures of other countries. Also a possibility of utilization of folk music besides music courses is indicated.

Keywords: folk music, problems of folk music education, song, folk song in East Asia